

【ポスター発表】

DV 加害者の意識に関する調査研究

—DV 加害者教育プログラム参加者へのインタビュー調査からの考察—

○ 関西学院大学教育学部 高井由起子 (2729)

キーワード：ドメスティックバイオレンス 加害者 性差別意識

1. 研究目的

近年、配偶者暴力相談支援センターに寄せられる相談件数は右肩上がりの状況にある。また、既婚女性の約3割が身体的、心理的、性的暴力等の被害経験があることが明らかになっている。このような交際相手や夫からの暴力は、被害者のみならず子どもにも甚大な影響を与えることは明白である。しかしながら、従来の研究では交際相手への暴力や妻への暴力の加害者に関する調査について、渉猟する限りほとんどみられない。暴力等の問題を根本から解決し、また予防するためには、加害者の傾向や価値観等を明らかにすることが必要不可欠である。山口のり子(2005)や森田ゆり(2001)は加害者の価値観や考え方の根底にあるものとしてジェンダーバイアス(性差意識)をあげている。この性差意識については、ことに男女共同参画社会基本法制定以降、学校教育現場、企業その他の職場等においてこれらの意識から派生する諸問題に対応するべく、多方面からの男女共同参画にかかわる教育が実践されている。しかしながら、配偶者暴力相談支援センターに寄せられる暴力等にかかわる相談件数は減少することなく、未だこれらの問題については解決するには至っていないといえる。

筆者は暴力の加害者を対象とした教育プログラムを大阪で実践している。ここでは、ほぼ毎週のように加害者から、あるいは被害者から、時には被害者、加害者側の弁護士を通して、参加希望の問い合わせの連絡がある。加害者の声の例としては、「今まで家庭の中で妻を見下し、傍若無人にふるまってきたが、それが原因で妻に『離婚してほしい』と言われた。改めて反省し、暴力を止めたいと思うが、どのようにすればよいかわからない。グループに参加して、暴力を振るわない自分になりたい」というものがある。こういった期待に応えるべく、日々グループを実践しているが、そのプログラムの内容は日本において十分吟味されたものには至っていない。そこで今回の研究では、加害者のインタビューを通して、暴力をふるう原因となるものを追及し、暴力をやめるための方策について考察するものである。

2. 研究の視点および方法

DV 加害者が暴力に至る加害行為の背景を把握するため、加害者の意識や価値観、パートナー等の役割に対する考え方を把握する。そのため加害者教育プログラム参加者対象にインタビューを実施した。質問内容としては以下の通りである。(1)グループに参加するよう

になったきっかけや状況、(2)暴力の種類について、過去にしてしまったものの確認、(3)暴力行動の原因についての考え方、(4)子ども時代、しつけなどで叩かれたりしたことがあるか否か。子どものころ家の中で暴力があったか否か、(5)パートナー以外の人に対する暴力の有無、(6)アルコール、ギャンブル、仕事（ワーカホリック）その他の依存症の有無とその状況、(7)女性やパートナー、家族に対する価値観の確認、その他である。

以上のインタビュー調査により加害者が陥りやすい人間関係、夫婦関係、親子関係さらには、価値観等についても明確にする。

3. 倫理的配慮

インタビュー調査対象者には事前に調査目的を説明し、調査結果の報告や研究発表を行うにあたっては固有名詞や個人等が特定される内容とはしないことについて文書をもって説明し、すべての対象者から調査協力の同意を得た。その他、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守して調査研究を実施している。

4. 研究結果

まず、暴力の種類を紹介し、過去にってしまったものを確認した。暴力の種類については、身体的暴力をしていない人についても、「相手に向かってバカにしたような言葉や汚い言葉を言う」といった言葉による暴力や、「物を投げたり壊したりする、ドアをボタンと閉める」といった精神的暴力をしていた。また、「暴力行動の原因についての考え方」については例えば、「自分の怒り、男のプライド、表現力の不足、コミュニケーションの不足、相手の無理解」といった内容があげられた。また「子ども時代や成長期での暴力的な経験や考え方」が影響している人が多くあった。「子ども時代、しつけなどで叩かれたりしたことがあるか否か」ということについても同様であった。

5. 考察

DV 加害者に共通する問題点として山口のり子（2005）は「家の中では自分は正しいと思こんでいる」「家の中では自己中心的」「女性を見下す意識」「パートナーや家族に対する所有意識」「パートナーの態度・行動や弱点に焦点を当てて大げさに考える」「暴力容認意識」「人との関係を上下や優劣で見て、自分が上と思うと横柄になる」といったことがあると指摘している。これらについてもインタビュー調査で聞いているが、ほとんどの人が「自分に当てはまる」と答えている。そしてそれについては、子ども時代や成長期での経験が大きく影響していることが考えられる結果となった。そのためパートナーに対して様々な暴力やモラルハラスメントを働いていても、その気づきや認識が甘くなっていることが考えられる。まずは暴力につながる言動にはどのようなことがあるのかを知ることが重要であると考察する。また自分が普段、家族やパートナーにしている言動がどのような影響を与えうるかということについて意識することの必要性がうかがえた。

追記：本研究は科学研究費基盤（C）による研究「女性への暴力加害者プログラムの実践に関わる実証的研究」の一部である。